

平成 25 年度 海外臨床薬学研修報告書

「薬剤師としての職能を広げるために必要なこと」

研修期間：平成 26 年 2 月 23 日～3 月 9 日

研修先：アリゾナ大学薬学部

薬学部薬学科 5 年

090973367

本山 美貴

私は、平成 26 年 2 月 23 日から 3 月 9 日まで、アメリカのアリゾナ州ツーソンにあるアリゾナ大学薬学部にて、約 2 週間の海外臨床薬学研修に参加した。私が今回の研修に参加した目的は、薬剤師としての職能を知りたかったからである。アメリカの薬剤師は日本と比較して、地位が高いことは有名な話であるが、アメリカでは何故、そこまで薬剤師が必要とされるのか、日本とは何が違うのかが私には分からなかった。また、薬局実習、病院実習を終え、日本の薬剤師業務を学び、今後の自分自身の進路を考える上で良い影響をもたらしてくれるのではないかと考え、研修に応募した。

今回の主な研修スケジュールは、アリゾナ大学の先生による私たちにに向けた講義や各学年の授業の見学、アメリカの大手薬局チェーンである CVS Pharmacy の見学、アリゾナ大学付属病院の見学であった。以下、研修に参加して強く感じたことや考えたことについて述べる。

今回の研修で私が最も驚いたことは、日本の薬剤師とアメリカの薬剤師で行える業務の違いはそこまで大差がなかったということだ。研修に行く前は、アメリカの薬剤師は予防接種をすることができ、さらに薬剤師には医師と同じような処方権があると思い込んでいた。しかし、実際に CVS Pharmacy で勤務する薬剤師やアリゾナ大学付属病院で勤務する薬剤師の業務内容を聞き、アメリカの薬剤師にも処方権はなく、テクニシャンがいることによる調剤業務の軽減はあるが、大きな違いは予防接種ができることのみであるように感じた。アメリカの薬剤師は処方権をもっているのではなく、医師との契約をおこなっていれば、特定の患者さんに対し処方をするができるということであった。また、テクニシャンの存在により、薬剤師は監査や患者さんとのコミュニケーションに集中することができる。行う業務はほとんど同じであるが、何故、アメリカの薬剤師は地位が高いのか。それは、アメリカと日本の保険制度の違いによるものであると考えた。日本は皆保険制度であり、すべての国民がなんらかの公的な医療保険制度に加入しているため、「誰でも」「どこでも」「いつでも」保険医療を受けることができる。しかし、アメリカはそうではない。アメリカの国民は保険に入っていない場合が多い。そのために、アメリカでは医療機関にかかるると多額な費用が必要とされるため、貧しい場合は医療機関での治療を受けることができない。また、日本では体調が悪いとき、医師にかかる場合が多いが、アメリカでは医師にかかるためにもアポイントが必要であり手間がかかる。このことも薬局薬剤師が必要とされる一因であるといえる。アメリカでは、体調が悪いとき、まず薬局の薬剤師に相談する。その薬剤師が OTC ではカバーできないと判断したとき、受診勧告を行う。これは、国民が薬剤師のことを信頼しているから成り立っているのではないかと思う。保険制度の違いが、薬剤師への信頼につながっていると考えた。

また、アメリカは最新で最先端の医療が提供されているというイメージがある。このイメージは正しかった。しかし、保険制度の関係で患者は治療を受けられないことが多いため、患者の治療満足度はかなり低いのがアメリカの現状であるとアリゾナ大学の先生がおっしゃっていた。アメリカでは、IPEP (Interprofessional Education and Practice) という他職種 (医師、看護師、薬剤師など) でのグループディスカッションを行うプログラムがある。IPEP は、他学部から専門知識を学び、自分の役割への責任をもつことができるようになり、かつコミュニケーションをはかることでチームワークの向上を目的としている。このような取り組みの中において、患者の満足度をあげるためにはどのようにしたらいいかという問題についてもディスカッションを行っているようだ。そして、この取り組みによりお互いが専門性を理解することができ、職種間での信頼関係を築くことにつながっていることが分かった。日本においても、IPEP のプログラムは行われているようであるが、まだまだ機会が少ないと思うため、さらに取り入れていくことで薬剤師としての職能のアピールの場を増やしていけるのではないかと感じた。

もう一つ印象に残っていることがある。それはアメリカの薬学生のモチベーションの高さである。アメリカでは分からないことがあれば、その都度質問することが当たり前である。大学の先生方も分からないことはすぐに聞いてもらい、ディスカッションをすることは必要なこととおっしゃっていた。また、アメリカと日本では教育システムが異なっている。アメリカで薬学部に入学するためには高校卒業後、プレファーマシーにて2~4年間他の大学で基礎科目を学ばなければならない。プレファーマシー卒業後、アリゾナ大学では約8倍の倍率の試験に合格した者のみが入学することができる。日本では、高校生の中に将来について決めなければならないが、アメリカではプレファーマシーにいる間に将来を決めることができる。つまり、薬学部に入学者は「薬剤師になる」という決意を持って入学する。これが、薬学生としてのモチベーションの高さにつながっているのであると考えられる。また、プレファーマシーにて基礎科目を学んできているために、薬学部での授業は複合型でより専門的な授業を受けることができ、かつ1年目から比較的、長期間の臨床現場での実習が行われていることも大きな違いであるといえる。日本の5年生の間に行われる薬局・病院実習の内容は2・3年生の間に各100時間ずつ行われ、4年生では7つのプログラムを各200時間以上の実習が行われている。各実習先の指導薬剤師は、常に学生がいるために教えなければいけないという手間はあがるが、長期間の実習であるために薬学生に助けられている部分もかなりあるために、薬学生の育成に力を入れて行っているとおっしゃっていた。このように長時間の臨床現場での実習は、現場に出たときに薬剤師としての職能をすぐに活かすことができるのではないかと感じた。

私は、信頼される、いつでも頼ってもらえるような薬剤師になりたい。今回の研修を通して、アメリカの薬剤師は患者さんだけではなく、他（多）職種の治療スタッフからも信頼され、必要とされていると強く感じた。これは、学生の頃から臨床現場にてコミュニケーションをはかっていることが関係しているのではないかと思い、私たちも5年生の実習時やIPEPに参加する機会があれば、積極的に参加し、コミュニケーションをはかっていくべきであると思った。一緒に研修に参加した学生の奥村さんが「アメリカの薬剤師が次に目標とすることは何か。」と病院薬剤師に尋ねたところ、「薬剤師としての仕事の幅を広げていくこと。現在は、退院後の患者さんの状態は確認できていないので、退院後の状況もフォローし、トータルコーディネートを行っていきたい。」とおっしゃっていたのが印象的であった。アメリカの薬剤師の職能を広げていくための積極さを私たちも持つ必要があるのではないかと思った。そのためにも常に様々な方たちとコミュニケーションを積極的にはかかると意識していく。

最後に今回このような機会を与えてくださった大学の先生方、研究室の先生方、応援してくれた両親や友人、様々なことを教えてくださったアリゾナ大学の先生方、学生の皆様に感謝する。